

### 1 自己評価及び外部評価結果(竹の里)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391000023		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム 金山・竹の里		
所在地	岩手県陸前高田市竹駒町字相川73-30		
自己評価作成日	平成21年10月29日	評価結果市町村受理日	平成22年2月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391000023&amp;SCD=320">http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391000023&amp;SCD=320</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	財団法人 岩手県長寿社会振興財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19番1号 岩手県福祉総合相談センター3階
訪問調査日	平成21年11月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム 金山・竹の里では、今年度からセンター方式を導入したことで、職員が入居者のことを、もっと知りたい、もっと何かできることはないか等考えるようになり、今まで以上に仕事にやりがいを持ち、楽しんで入居者と生活している。昨年同様、月1回はイベントを企画・実施して、入居者と家族、入居者と地域の方々が、一緒に楽しんで頂ける機会を設けている。  
竹の里棟では、学習療法を導入して、学習することはもちろんのこと、入居者と職員が1対1で会話する時間にもなり、入居者の気持ちを聴くことで、あらゆる面で良い効果が生まれている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

市街地から少し離れた農村の雰囲気が残るゆるやかな丘陵地帯に、2棟が隣り合うグループホーム”金山・竹の里”がある。各種の介護事業所を運営する母体法人の中の事業所として人的、その他のバックアップが期待出来る。中でも隣接のデイサービスセンターの活用は、利用者の日常生活に新鮮な刺激となって活かされるものとして期待出来る。事業所では、地域密着型サービスの目指すところを意識して、地域、行政、関係機関との適切な係りの工夫に努めている。  
また、利用者との信頼関係を築くためにも、職員の異動も最小限に止めるよう運営者の配慮がなされている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票(竹の里)

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念は「らしい」と気づき、「らしさ」を導き、「らしく」を知る』と掲げ、職員が共有している。ホーム内に理念を掲示している。	母体法人としての理念を基本に、更に事業所として独自に、職員全員の目線で生み出された、ふれ合いを大切に、地域にとけ込んだ、明るいホームを目指してなどの合い言葉で実践への取り組みがなされている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームで行事を行う際には、職員と入居者が近隣の家を回り、案内を出している。毎月20日の地区定例会に職員が出席し、地区の様子や行事を伺い、参加できるものであれば入居者と一緒に参加するようにしている。	以前からの自治会への加入のほか、毎月の地区定例会(地区戸数30~40戸)に職員が出席し情報交換の機会に活用のほか、地区行事への積極的な参加など、さまざまな形で自然な交流が行なわれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年6月に開催された、全国グループホーム大会で発表した事例を、大会前に運営推進会議と地区定例会で発表して、地域の皆さんから好評を頂きました。いつでも相談を受けられるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、第3金曜日に開催して、最近では災害対策について協議しました。会議で話された事を月1回のスタッフミーティングで、報告し、日々の業務に活かさせて頂いている。	隔月に開かれる、運営推進会議で事業所の行事などはスライドで説明し、より理解を深めて頂く工夫をしている。議題によっては消防署の職員にも参加をお願いし、災害時などへの対応の意見を聞くなど、運営推進会議が事業所の運営に十分活用されるよう努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に1回、市役所で行われる会議に出席して、ホームの近況報告や待機者状況等、情報を提供する機会を設けている。そのほか、行事をする際には、案内を出している。	市役所の担当部門で行なわれる2ヶ月に1回の会議に出席し情報交換の場に活用しているほか、運営推進会議のメンバーとしても職員の参加を頂き、密接な協力関係作りを努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	拘束はしていない。鍵は日中かけていないが、夜間は戸じまりの為にかけている。法人内の勉強会に参加して、身体拘束について学ぶ機会を設けている。また、日々の業務の中でも、外に出たがる入居者には、できる限り職員が付き添い出れるように努めている。	身体拘束に関する研修会には法人内外を問わず参加し、その資料をもとに事業所内での学習会が持たれている。夜間の施錠は(夜8:00~翌朝6:00)行なわれているが日中は鍵をかけておらず、散歩などの外出の時には職員が付き添いや見守りが行なわれている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今月、法人内で勉強会が開催され参加している。職員による虐待の徹底防止に努めている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 金山・竹の里(竹の里)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度について職員に説明、理解に努めている。入居者が必要と判断された時には、入居者・家族に制度の説明を行い、活用できるよう支援していききたい。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は十分な時間を取り、説明して入居者・家族から納得をして頂いたうえで、手続きを進め、同意を得るようにしている。今年度は、制度改定により重要事項説明書を新たに作成した。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者と話をし、そこから思いを気づけるように努めている。接遇に関するアンケートを取り、家族から意見を頂いた。家族面会時には、気軽に話ができるような雰囲気作りに努めている。	年1回家族アンケートを実施、今回は職員の接遇について家族からの意見の中に、笑顔での利用者への接し方についての意見があり、職員で話し合い改善に努めている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のスタッフミーティングで、意見や提案を聞くようにしている。また、平日頃より、何でも話してもらえるよう心掛けている。自分の意見が業務等に反映されれば、意欲向上につながるかと考えている。	毎月のミーティングを職員からの意見、提案の場にしていく。移動図書館の利用で、本の展示状況について職員からの提案があり、見やすいよう書棚を作って展示した所、本を読む方が増えてきた。また法人内での各事業所との1日交流会を実施して意見交換や提言、アイデア発信の場にしていく。	職員からの、事業所の運営に関する意見や提言の中には、制度上のことや、事業所だけでは解決出来ないような困難な事例なども考えられる。事業所だけで問題、課題を抱え込まず、包括支援センターや、行政の担当部門へのアピールや意見を聞くなど、外部に向っての働きかけも必要と考えられるので、関係機関との連携を更に積極的に図られることが、事業所に期待される。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人内で人事制度を導入しており、職員一人ひとりと管理者が個人面接を行い、目標設定を立て、目標をクリアできるように向上心を持ち、日々勉強している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内は、新人研修・2年目研修・プリセプターシップ等、経験年数に応じた段階を重ねた研修カリキュラムとなっている。法人外は、認知症の研修や各委員会に関連する研修に参加できるようになっている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県の定期定例会・沿岸南ブロック定例会に参加して、その中で勉強会や他ホームの職員と意見交換をして、情報収集の場として、サービスの質の向上につなげている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族やケアマネからの情報だけでなく、職員が本人と直接会い話をする事で、希望や要望を汲み取り、サービスに関して十分な説明を行っている。入居前には家族と共にホームを見学して頂き、目で見て、肌で感じて頂き、不安を解消し、安心して利用できるように配慮している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前に本人と共にホームを見学して頂き、職員や入居者の様子、暮らしぶりを見て頂いている。不安や要望には可能な限り対応し、サービス開始後も連絡表や面会等で本人の状況を報告し、その都度要望に対応している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、本人や家族の思いや状況を確認し、必要に応じて、包括や在宅のケアマネ、老健・特養の相談員と連携を図りながら、サービス利用について協議している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人主体とし、その人らしく生活できる環境作りを心掛けている。毎日読書している方や畑仕事をしている方がいる。職員は入居者を人生の先輩として従え、食事作りやお祭りごと、畑仕事等積極的に教えて頂いている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、連絡表を郵送しており、日々の生活や身体状況、行事に関して報告している。写真やお便りも同封し、離れているご家族にも安心して頂けるような取り組みを行っている。相談事があればこちらからも連絡し、ご家族と一緒に問題を解決していく関係作りができています。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外に出る機会を増やし、ドライブでふるさと巡りや馴染みの場所へ行ったりしている。また、美容室も昔から通っている所へ現在も通い、一緒にお茶を飲み会話を楽しませている。	在宅当時の馴染みの場所に出掛けたり、ふるさと巡りなど以前の生活を思い起こすよう工夫している。インフルエンザ等感染症対策もあり、外出も少なめのため短期間のドライブなどで、ストレス解消の支援もしている。		利用者がかつて築いて来た、地域、馴染みの人、物、場など一人一人さまざまな歴史が想像出来ます。認知度のことから本人から聞き出せない場合、家族、知人、友人、近所の商店など情報源を広げて馴染みの関係継続に努められたい。また、新しく深い馴染みの関係になる、事業所の職員とは支えてくれる関係だけではなく共に支え合う関係作りが望まれる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士でもなじみの関係ができています。食事やレク・行事等、一緒に行くことで楽しい時間を共有できています。体調不良の方を心配する声も聞かれ、それぞれ一緒に生活している仲間という気持ちが現われている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	新しい事業所へ遊びに行き、本人の様子を伺っている。体調不良で入院し、ホームを退居となっても、入院先へ面会に行き、家族から相談を受け、少しでも不安解消できるように努めている。「元気になることを祈って」職員・入居者が千羽鶴を折り渡してくる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員一人ひとりが、担当入居者を持ち、入居者から話を聞いたり、日常の何気ない一言から気持ち、希望等を読み取り、職員間で話し合っている。	”認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式”を導入。スタッフミーティングでの支援への手がかりを話し合うほか、日常生活の中からも意向などの把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者との会話や家族の面会時に話を聞き、一人ひとりの情報をセンター方式のシートを通して把握できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日、朝と夕に申し送りをして、その日の状態を把握できるようにしている。月1回スタッフミーティングを開き、入居者のニーズや問題等の相談をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の希望や意向に沿ったケアプランを作成して、カンファレンスを開き、スタッフで検討し、ケアを行っている。	毎月定期的に、スタッフ全員でのカンファレンスで状態の変化など、見逃さないよう注意深い観察で見直し行なうなど臨機応変に対応している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各入居者の生活を記録用紙に記入している。ADL、認知症の変化等細かく記録をして、職員で情報を共有し、個々のケアに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ADL低下などの際は、家族と相談して、その状況に合った他事業所を説明している。必要とあれば、その事業所に相談している。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 金山・竹の里(竹の里)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	月1回来る移動図書に入居者と一緒に行って、好きな本を借りてくる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけの病院への受診を継続している。ご家族が付き添いで受診する場合には、ホームでの様子・健康状態等を文書にし、ご家族へ渡し、主治医に渡して頂いている。	通院介助は原則、家族でとしているが、職員での対応も支援している。利用者の身体状況が解りやすいようにかかりつけ医に伝わるよう、受診連絡表を家族に渡し、伝達を密にしている。又、職員が介助したときには家族に電話で報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の健康指導を兼務の訪問看護師が行っている。申し送りノートを活用して、情報を共有できるようにしている。急変時は、看護師へ連絡して訪問を依頼する。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、家族同意のもと、ホームでの生活状況を情報提供している。また、できる限り病院に面会に行き、本人の状況を把握できるようにしている。退院日が決まれば、看護師から情報を提供して頂き、スムーズに退院できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人の身体状態を見て、本人・家族の意向を確認した上で、看取りに関する説明を行っている。ホームで看取りを希望された場合には、往診可能な医師へ主治医を変更して頂き、継続して支援できるよう主治医や看護師と連携を取っている。	利用契約時、家族に説明して看取りになった時に改めて契約書を交わしている。終末期往診可能な医師の確認と本人の症状の変化に伴い家族の考えの変化にも対応出来るよう、医療との連携も合せての支援の取り組みがなされている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応の勉強会を開き、対応できるようにしている。マニュアルも作成して、いつでも職員が見れるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策マニュアルを作成している。年2回防災訓練を実施している。運営推進会議で、地域の方々や災害時について協議をして、お互い協力し合うことになっている。	避難訓練は年2回実施されている。本年度中に夜間の避難訓練(午後8時頃)を日常の状態で実施し、課題の掘り起こしやマニュアルの点検につなげる予定が組まれている。	災害時、現場の状況を速やかに適切な内容で関係機関に伝えることは、減災のポイントだとも云われている。その連絡先や、連絡系統が一目でわかるような系統図(チャート)を、誰にでもわかる場所に掲示し照明のない場合も想定した備えが期待される。また、隣接のデイサービスとの災害時の協力、連携も有効かと思われる。

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いを工夫して、傷つけないように配慮している。訴えを傾聴し、皆が平等になるよう入居者と接している。また、職員の私的感情をもって接さないよう努力している。	プライバシー保護のマニュアルが整備され、所内での研修も実施されている。利用者同士のトラブルや、独特な生活行動をする利用者への対応は、一人一人の誇りを尊重するという共通認識で職員は支援に努めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望に沿えるよう工夫して、職員間で相談して対応している。場面場面によって違って来る対応も情報を共有しながら行っている。一人ひとりの好きな事を把握し、提供できることを選択肢の幅を広くし、喜んで頂けるよう努力している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々が居心地よく生活できるよう環境を整えている。その人の意思を尊重し、できる限り個々に沿った個別ケアを提供している。一人ひとりが好きな事、できる事を職員が理解し、対応できるよう努力している。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の好みの服を選んでもらったり、職員と一緒に着たい服を選んだりしている。個人の意思に沿って散髪してもらったり、行きつけの美容室へ出かけたり支援している。女性はマニキュアを付けている方もいる。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの能力に合わせ切る、ませる等行っている。片付けも職員と共に役割分担しながら行っている。また、イベント食や外で食べる機会も設けている。	献立は職員が1週間交替で立て、カロリーや内容については法人内の栄養士からの助言を活用している。利用者から好みを聞くほか、イベントや季節食、外食など変化も工夫されている。また利用者の能力に合わせて出来ることの役割分担を決めて職員と一緒に作業するなど、会話を楽しみながらの食事になっている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その人の好みを考慮し、一人ひとり食べられる量を提供している。水分もお茶のほかに何種類か飲み物も常備しており、いつでも温かい、冷たい物を提供できるようにしている。1日の水分量が1000cc以上になるよう努力し、水分量を職員が把握できるよう、チェック用紙に記入している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その人に合わせ、声掛け、見守り、軽介助で対応している。残歯がある方は自力で残歯が磨けるようジェスチャーをして磨くよう促している。朝・昼・夕食後、口腔ケアをする習慣がつくようになっている。口腔ケアを行ったか、職員がチェック用紙に記入している。			

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 金山・竹の里(竹の里)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、排泄パターンを把握し、定時にトイレ誘導を行い、トイレで排泄できるよう支援している(尿便意曖昧な方)。下剤での排泄コントロール時も、排泄時間を把握しスムーズに排泄できるようにしている。又、失禁時は羞恥心を配慮しながら支援している。	排泄の完全自立の利用者、一部排泄補助用品の方、トイレ誘導の方、さまざまなパターンに対応するため日常での状況の変化に注意してトイレでの排泄が出来るよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	研修会に参加して、ホーム内で伝達講習を開催。毎日牛乳を提供している。水分をチェックしながら、水分摂取量低下を防止している。繊維の多い食材を取り入れた献立を工夫している。ラジオ体操やりハビリ体操など、体を動かす時間を設けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	余暇時間や就寝時間に合わせ、入浴時間を決めている。又、日中を好む方、夜間を希望する方にも配慮している。拒否があるときは、声掛けに気をつけ、気持ちよく入浴できるよう配慮している。	入浴は個浴で、1日おきに入浴出来るようにしている。病院の診察日の前夜には入浴を済ませるようにしている。同性介助を望む方には入浴日をずらすなど配慮しており、安全な入浴と楽しみな入浴になるよう心がけている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調に応じて自由に休めるようにしている。寝付けない入居者に対しては、話をしたり、飲み物を提供したりと工夫をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋にて内容確認を行い、服薬時はマニュアルに従いカートを使用して、誤薬を防いでいる。内服薬変更時は、その後の状態変化に注意している。家族対応の受診時は、主治医に文書にて状態報告をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事や調理など、一人ひとりの生活歴や潜在能力を活かした役割を持って頂くことで、楽しみを導き、意欲向上につながる支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ふるさと訪問やドライブ、買い物などで気分転換を図っている。お花見や紅葉など季節を感じて頂けるような行事も行っている。歩行での移動が困難な方には、車椅子を使用し安心して外出できるようにしている。地区の回覧板も回ってくるので、近所に届けに出かけることもある。	ドライブ、買物など日常的な事や、お花見、紅葉、行事などのイベントも仕組みまれて気分転換が図られている。車イスの使用などで外出を嫌う方にも対応している。	



岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 金山・竹の里(竹の里)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で所持されている方と、ホームで預かっている方がいて、欲しい物、必要な物があれば残金を確認しながら、一緒に出かけ購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話、手紙ともにいつでも受けられるように、家族や面会者に伝えている。希望があれば、こちらから電話をかける支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔や安全に配慮しながら、生活感を失わないようホームに合った家庭らしい空間を作るため、行事の写真や本だけでなく、季節の花や飾りを取り入れたり、自分たちで作成したものを飾るなどしている。	ホール、食堂、厨房が一体となった、広い共用空間の一角に畳が敷かれたコーナーが設けられ、多用途に使われている。十分な面積の共用空間なので開放感にあふれ、利用者一人一人が自由に過ごせるのと、常に職員から目の届く範囲で安全な見守りに有効な空間になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事用のテーブル席の他にもソファを置いた畳スペースを設けている。また、いつでも持ち出せる椅子もあり、好きな時に好きな場所で過ごして頂けるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた馴染みの物を持って来て頂くよう伝えているが、入居時新しい物を買われることも多い。居室内を畳にするか、フローリングにするかも希望に応じて対応している。	利用者居室はフローリング、畳と希望に応じて選択でき、タンス、テーブル、テレビなどそれぞれ持ち込み品も見られる。居室は居心地がよいように整理整頓され静かに落ち着いた時間が確保されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーや手すり等、安全に生活できるようになっており、できることは行える環境を整えている。さらに、必要なところがあれば、その都度整備している。		